



ボディコンディションスコアを活用したエネルギー摂取量判定

馬の健康状態を知るための指標として体重を測定されている方もおられると思います。愛馬の体重の長期間にわたる記録は、健康管理のみならず競技に向けたコンディショニングにも大きな助けとなることでしょう。しかし、馬体重の日内変動は意外に大きく、測定するタイミングはいつも同じである必要があります。また、体重はあくまでも測定時点での馬体の重さであり、体高や骨格に見合った個体ごとの適正体重にあるかどうかは別の判断が必要となります。今回は、そうした馬体のマクロな栄養状態の指標となるボディコンディションスコア（以下BCS）について紹介します。

・BCSは早い話、肉付き具合の点数化

BCSとは馬体の各部位（図1）を見た目や触診で点数化し、1点（極端な痩せ）から9点（極端な肥満）までの点数で評価する方法です。具体的には肋骨やき甲、尾根部や肩周辺を覆う脂肪の蓄積程度を順次手で触り各部位を9点法で評点、平均します。図2は標準的なBCSである4、5、6点の状態を示します。馬の世界では、生産地において繁殖牝馬のコンディショニング判定に応用され、BCSを6程度に改善することにより受胎率向上や早期胚死滅（妊娠初期の受精卵喪失）発生率の低下が確認されています。また、育成馬では肥満を防止すべくBCSを5に維持している育成場もあります。その他、最近は乳牛や豚をはじめ、犬や猫、ウサギなどペットの健康管理にも応用されているようです。品種も考慮する必要はありますが、様々な運動が課せられる競技馬においても、馬場、障害、総合ごとに適したBCSがあると考えられます。たとえば、力強い躍動感を強調する馬場馬ではやや高め、ジャンプ力が求められる障害馬は馬場馬よりは低め、といった馬体のイメージや変化、競技成績とともに実際の肉付き具合を突き合わせておくのはコンディション調整の参考となるはずです。

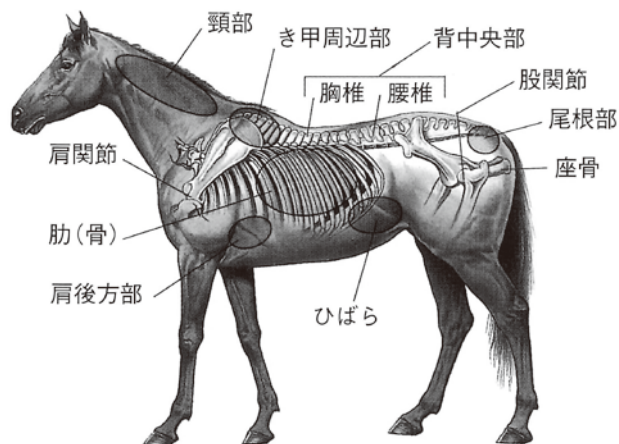


図1 ボディコンディションスコア判定部位

・栄養状態、とくにエネルギー摂取の影響が判断できる

馬では、同じような運動をしている同じような馬格の馬に同じだけの飼料を与えても肉付き具合が異なることがあります。いわゆる「太りやすい」あるいは「食べても太らない」といった馬ごとの特質で、前者はイージーキーパー、後者はハードキーパーと呼ばれます。なぜこのような違いがおこるのでしょうか？それは、エネルギー源となる飼料を消化（栄養素レベルにまで分解しそれらを吸収する生理作用）する能力に個体差があるからです。イージーキーパーは消化能力が高くどのような飼料からも効率的にエネルギーを吸収できる、一方ハードキーパーはその逆ということです。言い換えれば、適切な飼料給与量は馬によって異なるということになります。BCSはこのような馬ごとに異なるエネルギー摂取に対する反応を見定めるツールとも言えます。BCSを上下させるにはエネルギー価の高い濃厚飼料を5-10%程度増減し1か月間ほど様子みてください。

・BCS評価結果は人それぞれも……

BCSは、評価する人によってそれぞれ異なることがよくあります。ある馬のBCSをある人は5点といい、別の人は6点というかもしれません。正解はどちらか？ということよりも、同じ馬のBCSは同じ人がいつも同じ基準で評価する、というのが原則であり、それによってその馬のコンディションと適切なエネルギー給与量の関係がイメージされていきます。「自分の評価が正しいか、間違っているか」にとらわれず、まずは積極的に触り続けその感覚を点数評価してみてください。

| スコア | 馬の状態 |
|------------------|---|
| BCS = 4 少々やせている | 背に沿って脊椎の突起が触知できる。肋骨がかすかに識別できる。尾根の周囲には脂肪が触知できる。股関節結節は見分けられない。 |
| BCS = 5 標準 | 背中央は平らで、肋骨は見分けられないが触れると簡単にわかる。尾根周囲の脂肪はスポンジ状。き甲周囲は丸みを帯びるようにみえる。肩はなめらかに馬体へ移行する。 |
| BCS = 6 少々肉付きがよい | 背中央にわずかな凹みがある。肋骨の上の脂肪はスポンジ状。尾根周囲の脂肪は柔軟。き甲の両側、肩周辺や頸筋に脂肪が蓄積し始める。 |

図2 ボディコンディションスコア4-6